シュリー・ガネーシュ、
新しい始まりの神

ガリマ・ボーワンカー

「シュリー・ガネーシャヤ・ナマー」は、サナータナ・ダルマ――個人の一時的な信条を超越し、そしてその実践がモークシャ、解放へと導く、永遠で普遍的なダルマ――に従うすべての人、そしてガネーシュ神の祝福の重要性を理解するようになったすべての人によって、新しい一日の始まりに朗唱され聞かれる祈りです。重要な出来事――冒険的な新事業、誕生日、記念日、新居への引っ越し、結婚式――の始まりに、仕事に出掛ける時に、旅に出立する時に、人々が熱心に祈願するのはガネーシュ神の慈悲深い存在です。ガネーシュ神にその祝福を請うことは、その日、その出来事、その儀式が、良いエネルギーに満たされ、障害に妨げられず、順調に成功裏に終わることを確かなものにすることです。

ガネーシュ神は、シヴァ神と女神パールヴァティーのゾウの頭を持つ息子で、ヒンズー教やインド文化の中で広く崇拝されている神です。そして、それだけではありません。必ずしもこの神を崇拝しているわけではない人々でさえ魅了してきたガネーシュ神には、何かがあります。あらゆる文化の人々がガネーシュ神のムールティを持っており、家や仕事場、オフィス、車にさえ飾っています。このように、ガネーシュ神は宗教や精神的伝統のあらゆる垣根を超越しています。

ガネーシュ神の誕生

ガネーシュ神の誕生の物語、そして彼がどのようにゾウの頭を得たのかについての物語は、とても魅力的です。

ある日、独りでいた女神パールヴァティーは沐浴（もくよく）したいと思いました。沐浴している間、誰かに扉を見張ってもらう必要があると気づきました。そこで素晴らしい考えを思いつきました。彼女は自分の体に塗っていたビャクダンとジャスミン油のペーストをいくらかこそぎ落としました。それを練って粘土のようなものにし、美しい少年の形に作り上げました。そして、自分の息でその少年にプラーナを吹き込み、命を与えました。彼を自分の息子として任じ、扉を見張って絶対に誰も中に入れないよう命じました。

扉で少年が見張りとして立っていると、シヴァ神が女神パールヴァティーを探してやって来ました。彼は、女神のいる部屋の扉に向かいました。扉を見張っていた少年は、シヴァ神が部屋に入るのを止めました。「恐らく、この少年は私を知らないのだろう」と、シヴァ神は考え、自分はパールヴァティーの夫であると少年に説明しました。しかし、少年はシヴァ神を入れようとはしません。「母は、本当に誰も中に入れるなと私に命じました。私はその命令に従っています」。伝説によれば、その結果二人の間に起こった争いの中で、シヴァ神は三叉（さんさ）の矛で少年の首を断ち切ったとされています。

この騒動を聞いて、女神パールヴァティーは扉を開きました。少年が床に横たわって死んでいるのを見て、彼女はシヴァ神に、少年は自分たちの息子あることを告げ、彼を生き返らせるよう求めました。

シヴァ神は、いつも神に仕えている半神と半女神たちの集まりであるガナに、急いで彼らが最初に見た生き物の頭を持ってくるよう頼みました。ガナたちはすぐにゾウの頭を持って戻って来ました。この生き物の素晴らしい特質を知っていたシヴァ神は、そのゾウの頭を息子の首の上に優しく置き、そして少年はすぐに目を開けました。息子を愛情込めて抱き締め、シヴァ神は、彼がガナの指導者になることを宣言し、彼にガナパティまたはガネーシュ、「ガナの神」という名を与えました。

彼に多くの祝福を与え、シヴァ神は、息子のガネーシュがこの宇宙で賢く学識のある神として知られるだろうと宣言しました。吉兆を具現する者、そしてあらゆる障害を取り除く者として尊敬されるだろうと。シヴァ神は、この宇宙で重要な任務が神や人によって遂行されなければならない時には、ガナパティが一番先——アグラ・プージャ——にあがめられるだろうと明言しました。

ガネーシュ神の姿

どの神話的な伝説もそうですが、この物語には、初めにそこから読み取れるものをはるかに超えて広がる意味があります。神の吉兆の意図は彼の言葉や行いのすべてに浸透しているので、私たちは、彼が息子にゾウの頭を与えたのは偶発的な出来事ではないということを確信できます。シヴァ神が息子にゾウの頭を置いたのは、ガネーシュ神が強大なゾウの際立った資質の数々を体現し、それらをこの宇宙に住むすべての利益のために用いるだろうと知っていたからです。

従って、ガネーシュ神の身体的な特徴と性質には豊かな象徴的意味があります。

- 頭：ゾウは、その知性と素晴らしい記憶力で知られています。ゾウの頭によって、シヴァ神はニャーナ、「英知、識別力のある知性」を並外れた記憶力と共に息子に与えました。
- 大きな耳：ゾウの耳によって、ガネーシュには、数多くの信奉者たちの祈りを聞く鋭敏な能力があります。
- 小さな目：ゾウの小さな目によって、ガネーシュ神には、しっかりと合った焦点、鋭い集中力があります。
- 長い鼻：ゾウの鼻は強く柔軟で、どの方向にも動かすことができます。ガネーシュ神にとって、この大きく機敏な鼻は、インドでのガネーシュ神の像やムールティの多くに見られるように、音節 ॐ の形を取ることができます。彼はオームカーラスワルーパ、「ॐ の

形」として知られます。彼は最高にマンガラ――吉兆――な、原初の音を具現する者です。

- 障害を取り除く能力：ゾウは、小枝や、葉や、石や、倒れた木の幹など、途上にあるあらゆる障害物を除き、他の動物たちが深い森を容易に動けるよう道を作ります。ガネーシュ神も同様に、彼の信奉者たちやすべての探究者たちがサーダナーのゴールに到達できるように、彼らが進む道の障害を取り除く能力を与えられています。

ガネーシュ神はしばしば4本の腕を持って描かれており、それぞれの手は、精神の探究者にとって非常に意味のある物を持っています。一部の物は複数の意味を持つ場合があります。時には、それぞれの手に一つ以上の物を持って描かれている場合もあります。描かれている絵によって違う物を持っています。しかしながら一般的に、ガネーシュ神は次のように表現されています。

- 彼の右前方の手は、アバヤ・ムドラーの形で持ち上げられ、信奉者に祝福を与え、彼らの恐れを追い払うしぐさをしています。それはまた、避難所と加護を与える象徴でもあります。

- 彼の左前方の手は、彼を最も喜ばせるおいしくて甘いお菓子、モーダカを持っています。モーダカは、サーダナーの究極の実りが持つネクターのような甘美さ、つまり神と一体の境地を象徴しています。

- 彼の右後方の手は、障害を切って撃退する「おの」、パラシュを持っています。それは、サーダカにとってサーダナーに望まないものを切る、または取り除くことを象徴しています。

- 彼の左後方の手は「輪縄」、パーシャを持っていて、それはすべての世俗の欲望と妄想を捕らえて破壊し、探究者を精神の旅に引き戻します。時々、この手にハスの花を持つこともあり、それもサーダナーのゴールを達成することの象徴です。

- ガネーシュ神の手の一つに、アンクシュ、「突き棒」、すなわちフックが付いた鉄か木製の長い棒を持っている姿が見られることもあります。アンクシュは、人々を正義の道にとどめ、サーダナーの途上にある探究者たちを導きます。アンクシュはまた、探究者が外側の対象物に集中しがちな感覚を制御し、代わりにそれらを内側に向けることを思い出させる役目をします。

インドの教典では、すべての神々は、「乗り物」、ヴァーハナと共に描かれています。ヴァーハナは文字通り「運ぶもの」を意味し、神々はそれを使って領域から領域へと移動します。ヴァーハナは通常、動物または鳥です。それは、探究者が育むのに望ましい資質または傾向、あるいは獲得することが重要なそれらを表します。 ムーシャカ、「ネズミ」は、ガネーシュ神のヴァーハナであり、神の足元に座して描かれています。 ヴァーハナとしてのネズミは多くの点で注目に値します。

ネズミはマインドの象徴であり、その自然な性向はチャンチャル、つまり「常に動いて」います。しかし神の恩恵によって神の方を向く時、神の足に没頭する時、マインドは神への奉仕に集中し、ささげられるようになります。すると、まさにネズミのように、マインドは行く手のどんな障害をも切り抜けることができるのです。

ガネーシュ神の乗り物であるネズミはまた、この宇宙では、たとえネズミのように小さい生き物でさえ、取るに足らない、もしくは他より重要でないことはなく、すべてに独自の価値と有用性がある、という視点も表しています。

ガネーシュ神は、あらゆる年代の人々に愛されています。丸い大きなおなか（それは宇宙を包含し、また、モーダカへの愛を描写したものでもあると言われています）、ゾウの頭、乗り物であるネズミ、嬉しそうにほほ笑んでいる目、彼についてのたくさんの物語の中で語られるおちゃめ

な行いなどで、ガネーシュ神は人々の心を奪います。インドのマハーラーシュトラ州では、彼は愛情を込めて、バーッパー、「王さま」と呼ばれています。

『シュリー・ガネーシュ・パンチャラトゥナム』の最初の詩節で、偉大な賢人アーディ・シャンカーラーチャーリヤは、ガネーシュ神のマノーラマの姿、「魅惑的で愉快な」姿を、次のようにたたえています。

> मुदा करात्तमोदकं सदा विमुक्तिसाधकं
> कलाधरावतंसकं विलासिलोकरक्षकम् ।
> अनायकैकनायकं विनाशितेभदैत्यकं
> नताशुभाशुनाशकं नमामि तं विनायकम् ॥१॥
>
> *mudā karātta-modakaṁ sadā vimukti-sādhakaṁ*
> *kalā-dharāvataṁsakaṁ vilāsi-loka-rakṣakam* ।
> *anāyakaika-nāyakaṁ vināśitebha-daityakaṁ*
> *natāśubhāśu-nāśakaṁ namāmi taṁ vināyakam* ॥
>
> ヴィナーヤカ神に敬意を表する、
>
> 甘いモーダカの形で荘厳な喜びをその手に持つ者よ、
>
> 解放を達成する道を照らす者よ、
>
> 月の満ち欠けに彩られ、
>
> この世界のすべての人に保護を与える者よ。
>
> ヴィナーヤカ神に敬意を表する、
>
> 道を見失ったすべての人を導く者よ、
>
> 内と外のあらゆる否定的で邪悪な力を破壊することで
>
> 彼らを守る者よ、
>
> あらゆる不吉を取り除く者よ。[1]

ガネーシュ神の崇拝

インドでは今日でも、ガネーシュ・スマラナ「思い出すこと」とガネーシュ・プージャーは、あらゆる宗教儀式、個人の人生におけるあらゆる重要で吉兆な出来事、大小を問わずあらゆる新し

い試み、そしてほとんどの社会的、文化的な行事の前に行われます。シュリー・ガネーシュは新たな始まりの神なのです。

その英知と知性ゆえに崇拝されるガネーシュ神は、芸術と文学の守護神としても崇拝されています。実際に、彼は時々、さまざまな楽器を演奏する演奏家として、あるいは至福に満ちた踊り手、書き手として描かれます。学者、詩人、作家は創作活動が成功するように彼の恩恵に祈り、またインドの伝統舞踊の演技やヒンドゥスターンの伝統音楽の公演はすべて、ガネーシュ神に祈ってから始めます。

『ガネーシュ・アタルヴァシールシャ』によると、ガネーシュ神は、サトルボディ（霊妙体）のムーラーダーラ・チャクラ――背骨の基底部にある根源あるいは基盤のチャクラ――に住んでいます。このチャクラに座すガネーシュ神の恩恵によって、探究者は精神の旅における障害を根こそぎ取り除き、彼らのゴールの達成に向かって動き続けることができます。

ガネーシュ神のさまざまな名前を呼び起こす

インドの教典は、ガネーシュ神に多くの名前を付けています。ガネーシュ神の名前のそれぞれが、ラクシャナ、すなわち彼が体現あるいは象徴する、そして私たちが彼を崇拝する時に思い起こす「特質」を明らかにしています。最も広くはヴィグナハルターとして知られるガネーシュ神は、ヴィグナ、「障害」――外側と内側の両方に現れる障害――を撃退する者です。人はより深く熟考することで、「外側」にあると受け止めている障害が、実際にはその端緒を内側にたどれることに気づきさえするかもしれません。

ガネーシュの別名には、このようなものがあります。エーカークシャラ（単音節 μ の姿の者）、ブッディプリヤ（知性を人格化しているブッディの最愛の者）、マンガラムールティ（吉兆の具現）、プラタメーシュワラ（すべての神々の中で第1番目）、シッディヴィナーヤカ（成功をもたらす者）、ヴィディヤーヴァリディ（知識の大海）、そして、エーカダンタ（1本の牙を持つ者）――というの

も、ガネーシュ神はよく知られているように、片方の牙を折って賢人ヴィヤーサが口述した偉大な叙事詩『マハーバーラタ』を筆記したのです。

ガネーシュ・ジャヤンティとガネーシュ・ウットゥサヴァについて

インドにおいて、そして世界中に住んでいるインド人によって祝われているシュリー・ガネーシュをたたえる二つの有名な行事があります。

- ガネーシュ・ジャヤンティ、すなわちガネーシュ神の誕生は、ヒンズー太陰暦のマーグの月の満ちていく月の第4日目に祝います。それは、グレゴリオ暦の1月または2月に当たります。

- ガネーシュ・ウットゥサヴァは、ガネーシュ神をたたえる10日間の祝祭です。素晴らしい献身と興奮、そして喜びと共に、それはインド中で祝われます。特にマハーラーシュトラ州では、一年の中で最も大きな祭りの一つです。祝祭は、ヒンズー太陰暦のバードラパダの月（8月または9月に相当）の満ちていく月の第4日目の、ガネーシュ・チャトゥルティーで始まります。ガネーシュ・ウットゥサヴァをガネーシュ神の誕生のお祝いと考える人々もいます。また、賢人ヴィヤーサが、ガネーシュ神に叙事詩『マハーバーラタ』を語ったことを記念するものと考える人々もいます。この祝祭は、10日後のアナントゥ・チャトゥルダシーの日、満ちていく月の第14日目に終了します。

チャトゥルティーの日、マハーラーシュトラ州の人々はシュリー・ガネーシュを家の中に招き入れます。彼を自宅に迎え入れるために、まず人々は清掃して、祭壇のための場所を用意します。それから、盛大に祝いながらシュリー・ガネーシュのムールティを運び入れ、特別なプージャーを行って彼を祭壇に据えます。人々は祭りの間、毎日、沐浴させたり、食べ物や花や甘いお菓子をささげたり、アーラティーの儀式をしたりして、ガネーシュ神を崇拝します。

10 日目のアナントゥ・チャトゥルダシーは、神に別れを告げる日です。にぎやかな太鼓の音に包まれながら、それぞれの家族が自宅に据えていたムールティを持って、ヴィサルジャン――海、川、または湖に「沈めること」――のための色鮮やかな行列へ加わります。水辺に向かって歩きながら、人々は歌います。「ガナパティー　バーッパー　モー　ラヤー、プダチャー　ヴァルシー　ラヴァカル　ヤー！」。マラーティー語で、「シュリー・ガネーシュ万歳！　来年すぐに帰って来てください！」という意味です。

現代では、環境を保護し地球を守ることを切実に求める意識が人々の中で大きくなるに従って、インドにおいて、この愛されている祝祭にも、素晴らしい伝統が根付いています。現在ガネーシュ・ウットゥサヴァのために作られるガネーシュ神の美しいムールティには、微生物で分解される材質と塗料が使われており、環境に優しいものになっています。それだけではなく、大規模な水域にムールティを運んで沈める代わりに、多くの人々はそのために特別に水の容器を用意して、この儀式を自宅で祝っています。その後、人々はその水を植物や木々の水やりに使い、このようにしてすべてを大地にささげて戻すのです。

この祝祭の本質は、崇拝の精神です。それは、信奉者たちが体験するシュリー・ガネーシュへの愛と献身のバーヴであり、信奉者たちの家庭、心、そして全世界を満たすよう彼らが謙虚に願い、求める祝福なのです。

彼を崇拝すること、彼に保護を求めること、常に彼を心に留めておくことによる献身で ガネーシュ神を喜ばせる人々に、彼はシッディ――精神的な達成――、ブッディ――知性、知恵――、リッディ――富と繁栄――を与えます。

教典の美しいシュローカ、「詩」があります。それは、ガネーシュ神の恩恵を祈るために、彼の栄光を賛美するために、そして彼の保護を求めて祈るために、インドで広く朗唱されています。

वक्रतुण्ड महाकाय सूर्यकोटिसमप्रभ ।
निर्विघ्नं कुरु मे देव सर्वकार्येषु सर्वदा ॥

vakra-tuṇḍa mahākāya sūryakoṭi-samaprabha ।
nirvighnaṁ kuru me deva sarvakāryeṣu sarvadā ॥

おお、ガネーシュ神よ、

曲がった鼻を持ち、

強大な、堂々とした姿をして、

その光輝は何千もの太陽の明るさのようです、

どうか私にあなたの祝福を授けてください、おお、神よ、

それにより私のすべての努力が常に障害から免れますように。

© 2021 SYDA Foundation®.著作権所有。

挿画:Manisha Huedepohl